

新宿区の伝統工芸を通じたイベント実施の成果と学び

～新宿 Re 和 Style プロジェクトの取り組みから～

志塚 昌紀（東京富士大学経営学部イベントプロデュース学科）

キーワード：伝統工芸、地域連携、サステナビリティ

I. 研究の目的・背景

東京の染色業は、もともと江戸時代に武士の衣服などの製造需要が高まる中で、神田や浅草地域に根付き始めたとされている。しかし、大正時代に発生した関東大震災によって下流の水質が劣化し、染色に必要な澄んだ多量の水が得られなくなってしまった。このことをきっかけに多くの染色企業や工房は、清潔な水源を求めて神田川の上流、具体的には高田馬場や落合地区へと移転を重ねることとなった。この移動は、新宿地域における染色業の新たな発展の起点とされている。こうした背景から、現在では川の水を使うことはないものの、新宿区を流れる神田川や妙正寺川の流域では現在でも、染色に関わる工房が数多く軒を連ねている。

新宿区の工房で染め上げられる伝統工芸に、日本に14～16世紀頃に伝来したといわれるインドの更紗文様を、日本独自の技術や表現によって進化させた「江戸更紗」と呼ばれるものがある。非常に複雑な文様を作り出し、その繊細な技術と美しい表現は、今日でも多くの人々に愛され、日本の伝統工芸品として高い価値を持ち続けている。江戸更紗に用いられる染色は、型染めと呼ばれる日本の伝統的な技法が用いられる。この技法は、二十数枚の型紙を順に摺り重ね、同色系のグラデーションや微妙な陰影やぼかしを生み出していくことで、色彩の微妙な変化を鮮やかに表現することを可能にしている。熟練した職人による高度な技術と、細やかな感性を要求される非常に複雑で手の込んだ工程を経る必要がある。生み出された反物や着物は、もはや芸術作品としての価値を有し、現在では30万円を超える価格で取引をされているものもある。

一方で、着物は衣類や日用品として、そのサステナブルな特性が注目されている。一枚の反物から作られる着物はその構造として全体が四角形の布片で組み立てられているため、素材の節約に優れ、修理も比較的簡単に行えるという利点がある。このため、江戸時代には着物の痛んだ部分を巧みに交換したり、襟の取り替え、裏地の追加や除去、綿入れを施すなどして、一年を通して使い続けることができた。また、着物は定期的に洗い張りをして、長く愛用されることが一般的であった。

このように日本の染色技術や美に対する意識、生活様式は、将来世代に伝えるべき価値あり、伝統文化であるといえる。特に、反物を使用した衣服の持続可能な取り組みは、現代社会の大量生産、大量消費、そして大量廃棄の習慣に対して、意義深い示唆を提供しているのではないかと考える。伝統工芸が、需要の減少や継承者の不足により、近年さらに衰退している昨今、本取り組みでは、地域の伝統工芸の技術、歴史、思想、職人の姿などをイベントを通じて、新宿の地で学ぶ次の世代の若者達や、まだこの伝統を知らない人々に

向けて発信するとともに、この文化の継承と新たな発展に貢献することを目的とした。

II. 研究の方法・結果

本取り組みでは、区内にある2つの染色工房をはじめ、区内の染色業の連携組織や地域の金融機関、商業施設などとの連携により進めていった。展示イベントやワークショップ、ポップアップショップなど、様々なイベントを実施あるいは出展、参加することで、活動の発信をしていった。



藍染め体験ワークショップ



新宿マルイ ポップアップショップ



エコプロ展への出展



地域イベント「染めの小道」への参加

III. 研究の考察・結論

本取り組みを通じて、学生にとっては「染色」の学びや体験を通じて、伝統やサステナビリティに関する知識や関心を高める機会となった。また特に「新宿の地場産業としての染色業」を知ることで、地域への理解や興味を深める機会となったことも大きい。また、大学としては、染工房や金融機関、商業施設などとの関係性を深める機会となり、今後は、官公庁などとも連携しながら、学生による「新宿の染物」を使ったプロダクトやビジネスモデルの提案、観光プロモーションなどの企画などを検討していく予定である。

【参考文献】

- ・新宿区（1984）「写真が語る 新宿 今と昔」新宿区企画部広報課
- ・新宿区（1990）「新宿区のまちづくり'90～都市計画とまちづくりの動き～」新宿区都市整備部
- ・新宿区民俗調査会（1994）「新宿区の民俗（4）落合地区篇」新宿区立新宿歴史博物館
- ・戸沼幸市編著（2013）「新宿学」紀伊國屋書店
- ・菅原遼、畔柳昭雄（2017）「神田川流域における染色業を中心とした地域づくりとその今日的動向の特徴」『環境情報科学論文集』Vol. 31